

## ピアノソナタ第14番 嬰ハ短調 Op.27-2 『月光』

1801年作曲。第13番のソナタと同時にOp.27として作品番号をつけられ、作曲家自身により『幻想曲風ソナタ』という題名をつけられました。この時代の幻想曲とは、即興曲のように形式が自由であるものを指しています。本来の第1楽章が取り除かれ緩やかな第2楽章から開始されている点や、ウナコルダに関する細かな指示が記入されている点など、伝統的な古典派ソナタの形式から離れロマン派的な表現に近づいた書法が多く見られます。『月光』という愛称は詩人ルードヴィヒ・レルシュターブが「ルツェルン湖の月光の波に揺らぐ小舟のよう」と評したことに由来します。しかし、題名によらずとも誰しもが何かしらの情景を想起させずにはいられないような強い叙情性をこの作品は持っています。また作曲者自身はあえて『幻想曲風』とまでしか指定しなかった事実からも、その時その瞬間に浮かぶ情景をどのように音にするかという即興性がこの作品の醍醐味ではないかと感じています。

## ピアノソナタ第21番 ハ長調 Op.53 『ワルトシュタイン』

1803-4年作曲。前年に『ハイリゲンシュタットの遺書』に代表される精神的な危機に陥りつつも復活を果たしたベートーヴェンのもとにパリのピアノ会社エラールから新しいアクションを持つピアノが贈られました。それまでのピアノでは無かった音域や音量の幅にインスピレーションを得たベートーヴェンにより、この輝かしい作品が生み出されることとなりました。当初、現在では『アンダンテ・ファヴォリ WoO57』として知られる作品が第2楽章として置かれていましたが、あまりに長大すぎることから現在のコンパクトで第3楽章の序奏とも取れる形式のものへと置き換わりました。標題となった『ワルトシュタイン』とはベートーヴェンがボン時代から親交のある伯爵の名前であり、この作品の献呈を受けたことに由来します。

(北村 明日人)